

(1)はじめに

(古代吉備王国と内海)

吉備国は大和・筑紫・出雲と並ぶ古代日本の四大王国の一つと言われる程有力な地方国家の一つであった。勢力範囲は現在の岡山県全体と広島県東部と兵庫県西部に及ぶ。後の律令制の時代では備前国・備中国・備後国・美作国にあたる。古事記によれば孝霊天皇の時代に兵庫県の加古川以西が吉備の範疇であるという記述もある。吉備には大和と匹敵する巨大な古墳時代遺跡が残っており出雲と同じく早くから渡来人により製鉄文化の移入痕跡が有り、それが勢力の大きな原動力と見なされる。吉備王国(仮称)を論じる時大事な事は、古墳時代でも吉井川・旭川・足守川等の河口と児島との間は内海で主要吉備国は直接海に面していたので吉備の穴海と言われる。つまり吉備王国の主要な地域は当時の瀬戸内海灣で直接面していたという事。



(2)旧吉備王国(弥生時代:2C~3C)

弥生時代の吉備墳丘墓(楯築墳丘墓・宮山墳丘群)

吉備は弥生時代後期(2C~3C末)において倭国の埋葬様式に先駆的役割を果たしたと言われ、旧吉備王国の中心は備中の南部地域(楯築墳丘墓)であった。

- 1) 特殊器台・特殊壺(埋葬具・埴輪のルーツ)右図参照:
弥生時代後半に吉備独特の特殊器台・特殊壺が製作された。これ等は綾杉紋・鋸歯紋のある赤く朱色の筒形彩色土器で首長埋葬の祭祀に使われ弥生式墳丘墓(楯築弥生墳丘墓)から出土している。また後にこの特殊器台は埴輪に展葉され古墳時代に日本中に広まった。埋葬祭祀に用いられる特殊器台土器と特殊壺型土器は弥生時代後期に出現したが前方後円墳の波及と共に消滅した。その分布は備中南部と備前・美作・備後が主体であるが、出雲の弥生墳丘墓からも出土している。同じ土器は大和の最古級の前方後円墳(箸墓古墳・西殿塚古墳)からも出土していると言う事はこの当時吉備と大和とのつながりが深かったと言う点で注目されることである。このような特殊土器の埋葬を伴う弥生時代の吉備(2C~3C)の代表的な墳丘墓として楯築墳丘墓(備中)、宮山遺跡・宮山墳墓群が有る。



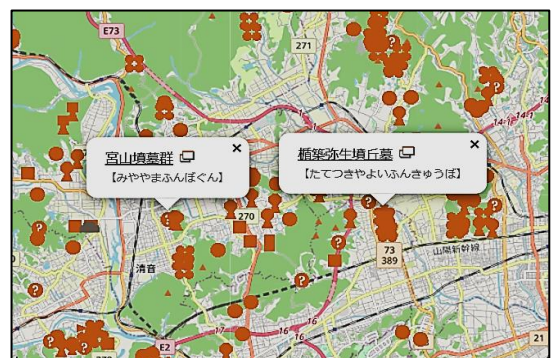
楯築弥生墳丘墓出土の特殊器台



みづの墓出土の特殊壺(備前天神山遺跡)

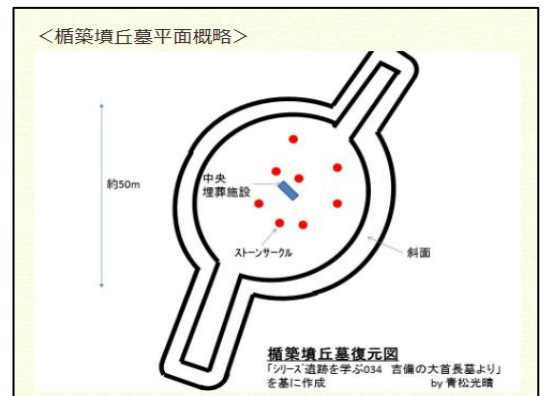
2) 墳丘墓の埋葬様式(石棺・土壇墓・特殊器台棺)

総社に有る弥生時代後期から古墳時代初期の宮山墳墓群は箱式石棺・土壇墓・特殊器台棺等多様な埋葬様式が出土する集団墓である。竪穴石室内からは中国製の鏡・剣・矢じり・ガラス玉なども出土している。



3) 双方中円形墳丘墓(楯築墳丘墓)(2C末~3C初)右図

楯築墳丘墓は中央円形で両側に方形突出部がある双方中円形墳丘墓で、同形の古墳としては猫塚古墳(高松市)、櫛山古墳(天理市)が有るが弥生時代に一足早く誕生した古墳でない墓は楯築墳丘墓である。双方中円形墳丘墓の片方の突出部を無くせば正に前方後円墳と同じ形になるという事はこの墳丘墓は大和朝廷前方後円墳のルーツと言え無いでしょうか。2世紀後半から3世紀前半で卑弥呼の時代と重なる。



(3)新吉備王国(大和王権と吉備:古事記・日本書紀より)

吉備地方においても縄文時代から弥生時代後期にかけて、少しの勢力の違いはあったかも知れないが家族・親族中心のほぼ平等な小氏族共同体社会であったと推定されるが、弥生時代中期以降、徐々に富と権力の差異を生じながら、平等な氏族社会の内に部族集団が誕生して、弥生時代後期には富と権力の差異が部族間でも生じて部族社会が形成され、埋葬もそれまでは共同墓地であったものが、吉備国・備中南部では特殊器台とか特殊壺等を埋葬する有力な豪族が楯築墳丘墓を築造して強力な地方部族国家が形成されつつあった。当時の古代地方国家としてはかなり先進国であった吉備国と大和朝廷との交流関係を古事記・日本書紀の記事をベースに古代史専門家の見解を以下に記述する。

1) 崇神天皇の四道將軍派遣と吉備国(3世紀半ば?)

吉備は、神武天皇が東征時(100年頃?)に「吉備高島の宮」で8年間滞在したと初見。その後、古事記で大和政権・纏向時代に第10代・崇神天皇(250年頃?)が四道將軍の1人「吉備津彦を西道に遣わす」と記述がある。(派遣は3世紀半ば?)

吉備津彦は孝靈天皇の第3皇子で名前は彦五十狹斧彦(ヒコイサセリヒコバコト)、播磨を「道の口」として陸路を取って派遣された事になっている。大和朝廷から派遣されてきた吉備津彦が吉備の国を平定した事になっているが吉備国は地元有力豪族によってかなり地方国家が形成されていたことから友好と協力関係を樹立したと言う事かも知れない。応神天皇の妃「兄媛」が里帰り時の吉備国の以下の対応からすると吉備津彦がに下って定着してその後裔が吉備臣となったとはとても言えない状況であると言えます。実際、吉備津彦と同母の姉とされる倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトヒモソヒメ)の箸墓古墳の頂上からは特殊器台形埴輪片と特殊壺型埴輪片が多数出土して、また埴輪も吉備起源説が発表されており、吉備の葬送儀礼の様式が大和首長の葬儀にも採用されている事から、従属関係でなく古墳文化草創期に吉備と大和が対等であったのでは。

2) 応神天皇時代(兄媛:えひめ)(4C初~4C中)

応神天皇の妃・兄媛が吉備へ里帰した時に応神天皇は淡路島から小豆島経由で岡山市下足守辺りの葦守宮を訪れている。兄媛の兄である御友別(おともわけ)が参上して子孫が膳夫(かしわで)となると約して饗応したので、応神天皇が吉備国各地に御友別一族を現地首長に封じたとの始祖伝承であるが支配体制は既に完成済? 始祖伝承の系譜は下表の通り。(応神天皇の後・兄媛と御友別一族系図)

応神天皇		○吉備王国系図(始祖伝承)	
(妹) 兄媛 えひめ 御友別 おともわけ	長子	稲速別(川島県に封ず)	…… 下道臣の始祖
	中子	いなはやわけ 仲彦(上道県に封ず)	…… 上道臣・香屋臣の始祖
	次子	なかひこ(上道県に封ず)	…… 三野臣の始祖
		弟彦(三野県に封ず)	…… 笠臣の始祖
		おとひこ (波区芸県に封ず)	…… 笠臣の始祖
(弟) 鴨別 かもめわけ	……	(苑県に封ず)	…… 苑臣の始祖
(兄) 諸彥別 うらこりわけ	……		

3) 仁徳天皇時代(黒日賣:くろひめ)(4C末~5C初)

古事記には仁徳朝で吉備国関係する記事が以下2件ある。

①仁徳天皇が吉備海部直(きびのあまのあたひ)の娘「黒比賣」を召し上げたところ太后「石之日賣」に責められ吉備へ帰ってしまったので天皇は淡路島から島伝いで吉備まで行幸したと言う伝。(吉備の娘が仁徳朝に嫁いでいた事)

②もう一つは紀伊国へ太后石之日賣が御綱柏を捕りに出かけた間に八田若郎女と婚を重ねたことを吉備児島出身の仕丁が水取司として仕えている時に上申したと言う話。(吉備児島群の仕丁が大和の水取司に仕えていた事)

これ等から5世紀仁徳朝の吉備国領域は吉備海部直(黒比賣出身)の支配領域で児島の地も含まれていたと見なされる。右に鳥越憲三郎氏が作成された古代吉備分国図を示す。吉備の内海に児島が浮かび、周辺境界を備後・美作・播磨に囲まれ吉備中心部は内海に流れる主要な河川で分国されていた事が良く解る。



吉備本国の分国図——鳥越憲三郎『吉備の古代王国』新人物往來社刊

4) 吉備王国古墳時代(巨大な古墳)(3C末～5C初)

吉備津神社・吉備路風土記の丘・備中国分寺などが残る岡山南部が吉備王国の中心部であったと推定される。弥生時代の墳丘墓の後、前方後円墳が吉備王国全体に分布している。年代を追って以下に記載。

①中山茶臼山古墳(4C初)、備中

大吉備津彦命の墓と言われている

前方後円墳:L=約120m、後円部径約80m

②浦間茶臼山古墳(4C初)、備前

古代吉備最古の大型前方後円墳、鉄製品出土

L=138m、後円部径=81m

参考(備前国初期古墳)

○4C初:備前車塚古墳L=48m

○4C初:操山古墳L=80m

○4C初:都月坂古墳L=33m

○4C末:金蔵山古墳L=165m、鉄製品

③造山古墳(5C初)備中、前方後円墳

吉備最大、全国4位、被葬者は御友別?

L=350m、後円部径=190m、

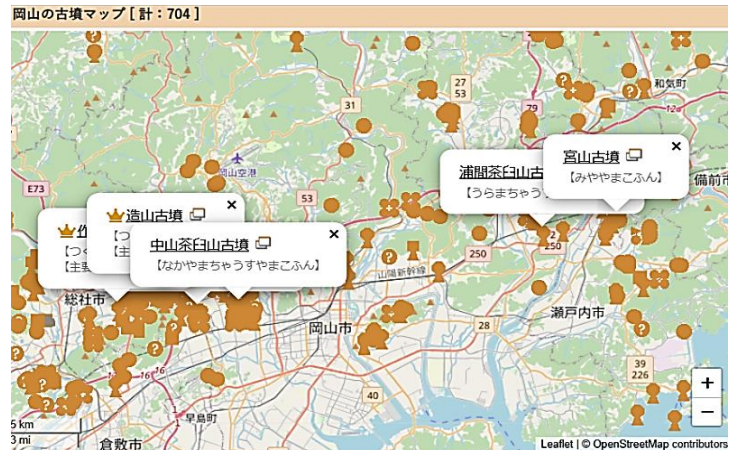
④作山古墳(5C中)備中、前方後円墳

吉備2位、全国9位、被葬者は稲速別?

L=286m、後円部径=174m、

⑤両宮山古墳(5C中)備前、前方後円墳

L=194m、後円部径約103m、



(4)大和朝廷の吉備退治(雄略天皇) 5C(中～末)

1) 雄略天皇の権力集中(皇族の排除・豪族の弱体化)

雄略天皇は中国史書に記される「倭の五王」最後の武王とされ宋書(倭国伝)でも「興没し弟武立つ」(477年)と言う記事から、5世紀中～末に天皇の権力拡大を断行し、強力な専制君主として君臨した天皇と言われている。その例を以下に紹介する。

a) 天皇継承資格のある皇族排除

第21代雄略天皇は允恭天皇の第5皇子で兄穴穗天皇(安康天皇)崩御後、皇位継承の邪魔になる兄弟・従兄を次々と粛清して王位に就いた。この時粛清した葛城円大臣の娘韓媛を妃として白髪皇子(清寧天皇)を得た。皇后の連れ子眉輪王は父の仇安康天皇を暗殺したが何の対策も取らない兄八鈞白彦皇子を殺害、葛城の円大臣宅に逃げ込んだ、眉輪王と別の兄坂合黒彦皇子も一緒に円大臣宅に火を放ち殺害。

b) 強大な中央・地方豪族の弱体化

葛城の玉田宿禰系の手足を殺害後、もう一流の仁徳・履中と繋がる葦田宿禰系の市辺押磐王子、同母弟の御馬王子も併せて殺害。玉田系葛城と婚姻関係にあった吉備地方豪族の田狭・子供の弟君を謀反の罪で追い落とし吉備勢力の弱体化を謀る。

c) 人質作戦

更に念の為、葛城の黒媛と吉備の稚媛を人質として召し上げ葛城氏・吉備氏の反逆防止。以上の例で見る通り、天皇承継資格のある皇族の謀殺、中央・地方で勢力の有る豪族の弱体化に徹底して取り組んだ独裁家雄略天皇が亡き後、朝廷は大混乱時代となる。

2) 雄略天皇の吉備退治

以下に引用する内容は日本書紀本文では大いに粉飾されて原資料を改修し創作されたとされているが、吉備退治に繋がる事件は次の二つの条文のとおり。

①吉備下道臣前津屋(しもつみちのおみさきつや)は帰郷した雄略天皇の官人・吉備弓削部虚空(ゆげべのおおぞら)が都へ帰る事を許さなかった。そこで天皇は帰朝を督促し召した所虚空が奏上「前津屋が少女を天皇役にして大人の女を自分役にして争そわせたり、大きな雉を自分に見立てて、弱小の雉を天皇に準えて格闘させ、天皇に準えた方が勝つと殺していると報告。そこで天皇は物部の兵士を吉備に派遣して前津屋と一族70人を誅殺した。

②吉備上道臣田狭(かみつみちおみたさ)が任那国司として派遣されている留守の間に妻の稚媛を天皇が召し出した。別本で「田狭の妻は葛城襲津彦の子である玉田宿禰の娘で

彼女が美人なので召し出した」と。任那の田狭は当時倭国の敵であった新羅に頼ろうとしたので、田狭の子供・弟君と吉備海部直赤尾に田狭討伐を命じて百済へ派遣。所が弟君は父殺害を取り止めて加担したので妻の樟媛(くすひめ)は大嶋に帰った。この2つの事件は眉唾物ですが、律令時代ではないとは言いながら、後年の律令に照らすと①は天皇を侮辱した大不敬罪、②は敵国に通じようとする国家反逆罪となる。いずれにしても創作話と思われる。

只、この当時大和朝廷は河内平野の大規模な治水・灌漑事業に着手しており、この事業は葛城氏を中心で進められていて完成の暁には葛城氏の勢力が絶大なものになることを恐れた雄略天皇が葛城の勢力を減退する機会を狙っていたと思われる。その1が允恭天皇が亡くなり亡王の葬礼の主宰を玉田宿祢に命じたが彼がそれを怠ったため王は軍隊を派遣して玉田宿祢を殺してしまった。その2、456年眉輪王が「殺された父の仇」である安康天皇を暗殺する事件が起きた時に雄略天皇は眉輪王を殺そうとしたが、彼が葛城の玉田宿祢の子の円大臣のもとに逃げ込んだので、円大臣も一緒に焼き殺してしまった。これで葛城の玉田宿祢系は絶えたが、葛城首長家は吉備王国王族と婚姻関係が有ったので、吉備王国の田狭が任那へ派遣されて留守の間に稚媛を吉備から人質として召しあげた。宮室に入った稚媛と雄略天皇との間に岩城皇子と星川皇子が生まれた。雄略天皇が479年に亡くなった後、稚媛は星川皇子を大王の位につけようとしたが雄略天皇の遺言で大友室屋と東漢直掬(やまとのあやのあた)等が先に大蔵を包圍して焼き殺してしまった。吉備国の応援部隊(40隻の水軍)が派遣されたが既に星川皇子は殺された後なので引き返して、その後暫く吉備は歴史上に登場しない。奈良時代になって、吉備下道出身の吉備真備の活躍が有名であるが吉備国の影は薄くなった。

○律令制下の吉備四国(備中・備前・備後・美作)



○古代吉備国と河川(鳥越憲三郎)



吉備本国の分国図——鳥越惠三郎「吉備の古代王国」新人物往来社刊より

○吉備の穴海（現在は河川堆積で内海が無くない岡山平野）



○吉備の主要古墳(史若会資料より)

吉備の主要古墳

